『伊勢物語』学習指導の展開
――戦後古典教育実践史の研究――

渡辺春美

はじめに―問題の所在と研究の方法

『伊勢物語』を教材とする実践の歴史はすでに一世紀を超えている。[注1] しかし、その内実に関する史的研究はなされず、成果と課題も明確にはなっていないのが現状である。本稿では、戦後（一九四五年から二〇〇〇年）における『伊勢物語』の実践史を、実践論文に基づいて考察したいと考える。

これまで『伊勢物語』は、在原業平に関わる遺産の書、和歌の模範の書として価値づけられた。また、文学史として後代の物語の産出との関連と影響からも評価された。近代から現代にかけては、作品世界そのものについて、恋愛と和歌を組み合わせた風流、描かれた献身的な愛、人生のあわれさ、美しさが評価されるにいたった。「みやび」への着目は戦前末に現れ、戦後期も長く経って主題としての位置を獲得するに至っている。

実践論文の選定は、教材、目標、指導過程、指導形態が分かることに加え、当事者性として学習者の学習実態を示す資料を掲載していることを重視した。ただし、時期によって論文数に多寡があり、一部、上の基準以外からも選定した。

考察にあたっては、古典観、興味・関心・問題意識の喚起、学習材の開発・編成、主体的学習の保証、付けるべき読む力の措定、協働的学習、創造的読みと批評、学習者による批評をとおした内化等に留意した。[注2] また、史的展開の考察においては、便宜的に、学習指導要領の改訂とその特徴に基づき、経験主義から能力主義へ―学習指導の模索（一九四五―一九六九年）、能力主義学習指導の展開（一九七〇―一九七七年）、言語活動主義に基づく学習指導の始発（一九七八―一九八八年）、言語活動主義に基づく学習指導の展開（一九八九―一九九八年）に分けて把握しようと試みた。

一　経験主義から能力主義へ―学習指導の模索

1　実践状況と背景

戦後、一九五一年に「中学校・高等学校学習指導要領（試案）」が告知され、経験主義に基づく古典教育が模索された。しかし、それは長く続かず、新教育への批判を背景に一九五五年に改訂され、能力主義の方向が打ち出された。一九六〇年の改訂では、能力主義に基づき古典の目標と指導事項が詳しくなり、古典教育の充実が求められるにいたった。この時期、『伊勢物語』の

実践論考は、きわめて少なく、一九六一年に広瀬節夫の「筒井筒」（二三段）を教材とする実践論文が見出されたのみである。

2 『伊勢物語』学習指導の実際―広瀬節夫の場合

(1) 古典教育観

広瀬節夫は、古文を面白くないという学習者に、古文にあっても、人間や生き方について考えたいという思いがあるのを見て取る。古文を文学として取り扱う以上、人間と生き方について考えるのは当然のことである。しかし、学習者に応える「文学教育」に高める方法に課題があるとした。(注3)

(2) 教材観

教科書は、金田一京助・佐伯梅友監修『高等古文』（三省堂）を用いた。『伊勢物語』は、和歌を中心に物語世界が叙情性豊かに構成され、「男女の間の喜びや悲しみや、あわれや苦しみの種々相が、深い愛情の世界の姿として美しく描」かれているとした。(注4)「筒井筒」の主題は、「ほかの女に心を動かした男が、妻の変わらぬ心に目ざめさせられて、再びもとに帰るという、一つの試練を越えて添いとげる男女の純愛」(注5)としている。

(3) 対象・時期

対象―学年不詳。実施時期―一九六〇年七月一日―六日（三時間）。

(4) 指導目標

目標は、以下の三点である。①歌物語という独特の形式をもって形象された、平安時代の人々の姿を読み取る。②叙情的な美しさに加え、登場人物が、平安時代の人々の心から、のっぴきならないものとして生み出されたことに気づかせる。③表現の特色、特に係り結びの持つニュアンスや、助詞の性格を学び、読みを深めるようにする。②については、「『筒井筒』の古代的な愛の歴史は、古代社会のしくみの中では、避けがたく存在した、人間の真実の姿であった。」とし、「人々の心と文学、文学と社会との関係に意識を向けていくのもたいせつ」(注6)と説明している。ここには、歴史社会学派の影響が窺える。

(5) 学習指導の留意点

留意点が、①主要な語句に絞り文中での働きを説明、②「問題学習」プリントを事前に配布、③歌物語の性格への着目、④作品の背景としての当時の男女の生活の相違の理解、⑤感想の自由な発言、⑥感想文を基に読みを深める、と六点挙げられている。①②⑤には増淵恒吉の指導法の影響が窺える。

(6) 学習指導の展開

学習指導の展開は、以下の通りであった。

	指導目標	指導の実際
1	(1)読みによるあらすじの理解。 (2)叙述の分解による内容理解。	①朗読の仕方―歴史的仮名遣い、古文特有の読みの正しい把握（前栽）。②あらすじの把握―黙読によるあらすじ把握と段落分け（三段）。 ①第1段落の把握―A主要人物・B時・C所・D境遇・E事件の展開・F言葉の持つ意味の検討の6点を考える手がかりとして内容理解。②第2段落の把握―6点の手がかりから内容理解。
2	（前時の続き） (3)主題の追求による内容理解。	③第3段落の把握―6点の手がかりから内容理解。 ①3人の人物について感想を話し合う。②妻がいながら新しい妻を持った男が、元の妻の所に帰る動機・原因を話し合う。③『大和物語』の読解と感想文。
3	(4)『伊勢物語』の特質の理解。	①『伊勢物語』の文学性把握―生徒の『大和物語』（一四九段）との比較の文章提示。語法・文体の特色把握。②『伊勢物語』の文学史上の位置の理解。
まとめ		『伊勢物語』の授業の感想文を家庭で書いて提出。

（広瀬節夫「『伊勢物語』の学習指導」『国語教育研究』三号　一九六一年四月　広島大学教育学部光葉会　一六―一三頁　参照）

指導計画の「主題の追求による内容理解」（2の(3)）においては、ア　この男をどう思うか、イ　その男にいい所はないか、ウ　男が元の妻の所に戻った理由は何か、エ　「元の妻」と「高安の女」とを比べてみよ、オ　なぜ最後に高安の女のことを描いたのか、カ　結局、この作品が書こうとしたものは何か、という問いによって理解を深めている。それぞれの問いかけに対する学習者の反応も記されている。「ア」については、「互いに思いあって一しょになったというだけに男の不誠実さが強く表現され、リアルなところがある。」[注7]などと、学習者の発表が記されている。「カ」の主題については、「一つの試練をへて、そいとげられる男女、とくに女の純情（純愛）をえがいた」とまとめられている。

(7) 学習者の理解―「筒井筒」と『大和物語』の比較

次のような感想文が掲載されている。一人の女生徒は、「伊勢物語が短文で人間の心理を描いてあるのに対して、この大和物語は、長文で情景が描かれている。だから、女の純情さについても、伊勢物語では、『風吹けば・・・・』の歌だけで表しているが、大和物語では、それに加えて、『かなまりに水を入れて・・・・』とあるが、あまり効果的ではなく、短文ではあるが伊勢物語の方が、何か感動的である。」[注8]と述べている。『大和物語』は冗長的に事件の展開が描かれ、『伊勢物語』は、簡潔な文で心理描写を行い、歌物語としての性格が顕著であって、和歌によって「女の純情」を表現して感動的であるとされている。比較読みを通して『伊勢物語』二三段の特色と主題がとらえられている。

3　成果と課題

「問題学習」、比べ読み、話し合いをとおして、学習者は、『伊勢物語』の歌物語としての特色をとらえるとともに、登場人物の心情を把握し、主題としての「女の純情」を理解するに至っている。男については批判的な感想も見え、現代社会における男女の愛についても考えを広げている。一方、歌物語と登場人

物が抜き差しならない時代性から生み出されたという文学と社会との関係の理解という目標には到達していない。広瀬節夫は、二三段の主題を「男女の純愛」とし、学習者もそのように読んでいるが、そのような読みへの疑問も残る。

実践方法の成果は、次の点に見える。①「問題学習」、②問いを軸にした求心的な追求、③読みの深化のための感想文の利用、④比較読みによって学習者の理解を深めている。

本実践の課題は、学習者の主体的学習を求めてはいるが、なお授業者主導になっている点、内容の理解が中心であり、育成すべき学力への配慮に乏しい点にあろう。

二　能力主義学習指導の展開

1　実践状況と背景

一九七〇年代に入ると高校進学率は九〇％を超え、落ちこぼれが問題になった。能力主義は限界が意識され、転換が求められるようになった。この時期には、環境破壊、人間疎外、主体喪失などの深刻な状況を背景として学校教育が問い直された。古典教育においても、人間を追求し、人間性に触れる教育が模索され、古典教育実践は、活性化し、多様性を増していった。しかし、作品別に見れば、この時期の『伊勢物語』の実践報告は、乏しいといわざるをえない。

この時期には、平野和一「『古典甲』の一つの扱い　伊勢物語『筒井筒』の指導」（『研究紀要』一一集　一九七三年四月東京都高等学校国語教育研究会）、細谷藤策「『伊勢物語』〈筒井筒〉教材の扱い方と実践授業の展開」（宮崎健三・野地潤家・石井茂編著『古典の教え方　物語・小説編』一九七二年五月右文書院）、世羅博昭「『伊勢物語』の学習指導―古典を意欲的にかつ楽しく読むことをめざして―」（『年報』二〇号一九七九年四月　広島県高等学校教育研究会国語部会　実践は一九七七年）が報告されている。

平野和一は、商業高校において「古典甲」で行った「東下り」・「筒井筒」の授業の内、後者の研究授業の報告をしている。[注9] 楽しく親しめる古典の授業を求め、現代語訳を添えたテキストを用いた。「筒井筒」の主題は、幼なじみの愛と女の純情としている。指導目標として、正しく読解し、鑑賞することによって古典に親しむ態度を養うとともに、読解の基礎的能力を身につけさせることが設定され、能力主義の影響が窺える。授業は一斉形態で、口語訳し、その後、次の点を取りあげた。すなわち、ア　男が高安に行かなくなった理由、イ　反省した男の心を端的に表した一語、ウ　古くから人々に親しまれた理由、エ　「筒井筒」で語られている愛に関する感想を尋ね、理解と鑑賞を深める指導を行った。

細谷藤策は、学習者の実態を、古典の学習に疑問を抱き、「古典に対する根強い拒絶がある」と捉えている。その改善のためには「古典の世界が現代と陸続きで」、生徒が「踏み込んで行くことができ、自分の目で見、自分の体で知り得るもの」[注10]ということを理解させることが必要とする。その上で、音読による

体で知る学習と、解釈後自由に感想・意見を言わせることとの二点を求めた。授業は一年生を対象に三時間をかけて行われ、読解と『伊勢物語』の解説とを行った後、三時間目に段落設定と章段の成立、各段に対する自由な感想・意見の発表と話し合いを通して、主題を追求しようとした。発問応答のほぼ全てと板書の一部とが記録されているが、話し合いは、求心的な追求がなされず、総じて有効に機能したとは言いがたい。

2 『伊勢物語』学習指導の実際―世羅博昭の場合―

(1) 古典教育観

読む意欲を高め、楽しさを実感させる授業が求められている。そのために、表現をふまえながらも、書かれていないことまで想像する読み方を求めた。また、一つのテーマのもとで一貫した学習を組織化していく方法が学習者の意欲を持続しやすく、学習効果を上げると考え、教材の開発・編成を行った。学習者の主体的で効果的な学習のための「学習の手引き」、傍注資料の作成も試みている。

(2) 古典教材の開発・編成

テーマに基づき、「愛」の観点から、異性・肉親・主従の間の愛の姿に関する章段が編成された。「異性間の愛の姿」は、初恋（一段）・片思い（四五段）・激しき恋（六段）・三角関係（二三・二四段）からなっていた。

(3) 対象・時期

高等学校一年生、一九七六年二学期（九月～一一月上旬）に、一六時間をかけて実施された。

(4) 指導目標

①古典読解の基礎を確実に身につけさせる。②「学習の手引き」を活用させることによって、学習法を身につけさせる。③登場人物の生活と心情を読み取らせることによって、運命に翻弄される愛と哀しみをとらえさせる。④想像力[注11]を生かして読むことによって、古典を読むことの楽しさを味わわせる。以上四点の目標は、技能目標―①②、価値目標―③、態度目標―④に分けられる。

(5) 指導の実際

報告は、「異性間における愛の姿」を中心になされている。

導入では、『伊勢物語』の紹介、学習テーマの設定と授業構想の紹介を行い『伊勢物語』学習の全体像をとらえさせている。

展開では、まず、「初恋」・「片思い」・「激しき恋」の読みが行われた。『伊勢物語』の世界になじませることを目指し、「基本的指導過程」として、一斉指導で、音読・範読→大体の内容把握（時・場所・登場人物）→段落ごとに精読→まとめと進めている。次に、「三角関係」（二三段）では、発展段階として文章を深く読み味わうことを目指した。「基本的指導過程」を踏んだ後、班別学習で「筒井筒」では、「二人の女に対してどの

ように感じたか。」「男をどのように思うか。」の二点を話し合わせている。

「三角関係」（二四段）については、三時間をかけて、次のように授業が展開されている。

指導事項	指導内容
《事前学習》 プリントによる学習 (1)音読 (2)内容把握 (3)中心課題の設定 (4)課題解決 (5)主題の追求 (6)現代の例 《発展学習》	⓪「あれこれ疑問をもったり、想像したりして読む」という「学習の手引き」一枚配布。「学習の手引き」の中の問に対する解答提出。 ①学習者に読ませた後、教師の範読。 ②時・場所・登場人物の整理、あらすじ紹介。 ③もとの夫を拒絶した女が後を追いかけた心理変化を明らかにする。 ④「学習の手引き」によって提出された解答でプリントを作成し、それを基に討議。 ア　夫が宮仕えに出た理由、イ　三年間の夫と女の生活と心情を想像、ウ　もとの夫を拒絶した女が後を追いかけた心情をポイントとした。 ⑤生活の貧しさゆえに起こった男女の愛の悲劇（運命に翻弄される愛の哀しみ）について考える。 ⑥現代につながる例を考える。戦争未亡人の話、出稼ぎ農民の話。 自由課題―「梓弓」を基に、夫の立場、女の立場から物語を創作。

（世羅博昭「『伊勢物語』の学習指導―古典を意欲的にかつ楽しく読むことをめざして―」『年報』二〇号　一九七九年四月　広島県高等学校教育研究会国語部会　実践は一九七七年　七五―七八頁参照）

「筒井筒」の実践で用いられた「学習の手引き」については、傍注方式で、読みの着眼点や方法、すなわち、文法、文脈理解、書かれていないことの想像、登場人物の心情把握、主題の追求などについて、読めば自然に身につくように工夫されている。

(6) 学習者の学習実態

学習者の実態として、「梓弓」の手引きの解答例、もとの夫と女の立場からの物語創作例が掲載されている。前者の内、女がもとの夫の後を追いかけることになった理由については、「㋒自分は今新しい夫と一緒になっているのに、前の夫は自分のことよりも私（妻）のことを思ってくれたのが悲しい。」「㋓もとの男があっさり身をひいたことが悲しく、もとの男がいとしいと思って追いかけた。」などが提出されていた。これらの解答を基に、「（女はもとの夫の―渡辺注）思いやり・純愛に心を激しく揺すぶられて、自分の本心を歌にする。女は、（中略―渡辺）後ろめたさを心の底に持ちながら、自分をこの上なく愛してくれていたもとの夫を失うことに対してたまらなく悲しく、かつ、その夫がいじらしくて、感きわまって後を追いかけた。[注12]」とまとめている。

(7) 本実践の特色

本実践は、一つのテーマで一貫した学習を組織化する「主題単元学習」や「学習の手引き」（「傍注資料」にもなっている―渡辺注）に大村はまの影響が窺える。本実践の特色は、次の点にあると考える。①「学習の手引き」の開発。②主題を基に組織化された学習指導。主題によって教材の開発・編成がなされ、学習者の意欲を引き出し持続させ、追求を求心的にする働きが見える。③一斉指導（「初恋」・「片思い」・「激しき恋」）→グループ学習による三角関係「筒井筒」→「学習の手引き」による三

角関係「梓弓」と、指導内容・形態を段階化し、学習を深化させた。④理解と表現を関連させた指導。⑤物語創作によって、登場人物の心情を豊かに想像させることと、感得させることが試みられた。今後は、段階的な深化を目指す学習指導過程の構築と付けるべき学力を見通すことが必要であろう。

3　成果と課題

①『伊勢物語』の主題は、教材とする章段によって異なるが、さまざまな愛、愛と純情、愛の哀しみとしてとらえられている。「みやび」とする把握は見られない。②広瀬節夫実践に関わる、読みを深めるための、発問（平野和一実践）・課題（世羅博昭実践）を学習者に与え、求心的に追求させ効果を上げた。一方、学習者自ら課題をとらえる力を養う必要もある。③世羅博昭実践では、一つのテーマ「さまざまな愛を求めて」のもとで一貫した学習を組織化する方法（主題単元学習（注15））が用いられ効果を上げている。④また読みの方法、着眼点を自然に習得させ理解・鑑賞を深めることに資する「学習の手引き」が開発された。⑤段階的・発展的な指導過程が採られている。⑥広瀬節夫実践に見られた、理解と表現の関連指導が行われている。⑦全体として付けるべき古典を読む力をどうとらえるかは課題である。

三　言語活動主義に基づく学習指導の始発

1　実践状況と背景

この時期は、若者に三無主義が現れる一方、校内暴力、不登校、いじめ問題が生じ、大きな社会問題となった。このような状況を背景に、一九七八年の学習指導要領の改訂は、ゆとりと充実を求めるものであった。教科の領域構造も表現・理解・言語事項の二領域一事項となった。この改訂によって、古典は「国語Ⅰ・Ⅱ」に統合され、選択科目としては「古典」のみに削減されるに至った。ここに来て、古典教育において、新たな方向が模索された。この時期の『伊勢物語』の実践報告も乏しい。

実践論文には、伊東武雄「古典学習指導の反省と課題―伊勢物語二三・二四段の受容の実態を中心に―」（『国語教育研究』二九号　広島大学教育学部光葉会　一九八五年六月）、森本真幸「高校生の性意識と『伊勢物語』」（『早稲田大学国語教育研究』五集　一九八五年六月　早稲田大学国語教育学会）がある。

森本真幸は、三年生に、純愛や身分を超えた愛、タブーをこえる愛など多様な愛を考えさせる諸段を教材として、学習者に男女の愛を考えようと呼びかけて実践を展開した。読解し、内容・表現を理解した後に感想を書かせ、優れた感想はプリントして配布し、それを手がかりに考えさせている。学習者は、現代に見られない純粋で激しい愛情の表白として『伊勢物語』を文学として新鮮に読んだとしている。この理由は、性を肉体的・即物的にとらえる学習者が、『伊勢物語』を心や愛情の問題と

考え、文化的な愛の表現にひかれたためと考えられている。

2 『伊勢物語』の学習指導―伊東武雄の場合―

(1) 古典教育観

高校生の古典離れを考え、興味・関心を重視する教材編成を求め、読みの方法に関しては「読解の三段階法」(注1)を適用する古典教育を求めた。また、感想法・創作法・手紙法・題名法・作文法・比較法による読みを行って理解を深めようとした。生徒の感想・鑑賞を大切にし、書く機会を多く持たせ、書くことにより思考を深め理解を確実にする学習を古典教育に求めた。

(2) 古典教材観

『伊勢物語』については、愛情の書であり、また、愛情を無視する藤原専制政治への批判の書であるとした。高校生が好きな古典として挙げる理由は、「男女の愛を中心にさまざまな愛の世界が物語られている」点にあると述べている。比較読みとして「筒井筒」と「梓弓」とを教材とし、「筒井筒」は無償の愛を、「梓弓」は愛の悲劇を主題として把握している。

(3) 対象・時期

対象は一年生二クラス、時期は、一九八三年一二月。

(4) 指導目標

指導目標は、次の通りである。①『伊勢物語』の愛の世界にふれ、その美しさを理解する。②男女の愛の世界についての思いを深め、人間の生き方について考える。③古文原文の微妙なニュアンスを味読する。④古語への関心・理解を深める。

(5) 指導の実際

学習指導は、次の通りに展開した。

	指導事項	指導内容
導入	(1)『伊勢物語』について	①愛情の書、②愛情を無視する藤原専制政治への批判の書、③歌物語。
展開	(2)音読	①範読、②音読練習、③指名された学習者が前に出て音読。
	(3)読解・解釈	①通釈→②ノートへの傍注作業→③文法読み→④表現読み。
	(4)構成	「筒井筒」―①幼なじみの愛、②大和の女性―無償の愛情、「梓弓」①夫と妻の別れ、②夫の帰宅、③妻の絶命―妻の哀しみ。
	(5)内容の整理	素材読み（人物・時・場所・事件・結果）を中心に整理し、ノートにまとめる。
まとめ	(6)比較読み	素材読みにより「筒井筒」と「梓弓」を比較。口語訳プリント配布。
	(7)読後の感想	一五〇字の感想メモ用紙に自由に書かせる。
	(8)アンケート	『伊勢物語』二三段・二四段を学習して―アンケート―①感銘度、②理解度、③効用、④学習上困ったこと、⑤疑問点、⑥登場人物、⑦感想、⑧二つの段でどちらがよかったか。⑨もっと読んでみたいか。

（伊東武雄「古典学習指導の反省と課題―伊勢物語23・24段の受容の実態を中心に―」（『国語教育研究』二九号　広島大学教育学部光葉会　一九八五年六月　一九一・一九二頁参照）

「筒井筒」と「梓弓」の比較は、素材読みの方法を用い、学習者と対話しながら、時・所・登場人物・事件・結果を観点として行われた。「筒井筒」では妻の無償の愛を読み取り、「梓弓」

では夫の大きな愛と妻の悲劇的な哀しみをとらえている。

⑹　学習者の学習実態

「筒井筒」と「梓弓」を比較して、学習者の一人は、「二三段は、最後ハッピーエンドになって良かった。この妻は、すごくえらいと思った。いやな顔せずに我慢して、なかなかできないことだと思う。／二四段は、この女がすごくかわいそうだった。男は、結婚するなと言ってやれば良かったのに。でも本当に妻のことを思っているんだなぁと思った。[注15]」と、自らの言葉で率直な感想が述べられている。学習後のアンケートによれば、「大変感動した」と「感動した」を合わせると約八〇％、「よく理解できた」、「だいたい理解できた」も、八九％に上っている。学習の成果が認められる結果になっていよう。

⑺　本実践の特色

①学習者の興味・関心をひくと考えられる「筒井筒」「梓弓」を教材化した。②授業者主導の学習指導であるが、「素材読み（場面）→文法読み（構成）→表現読み（表現のニュアンス）」の「読解の三段諧法」に基づいて授業が丁寧に展開され、学習者の理解が深められた。③ノート指導・感想メモ、アンケートなどによって学習したことの言語化や振り返りがなされ、理解を深めている。伊東武雄は、本実践後、「古典鑑賞指導の試み―伊勢物語の学習指導の場合―」（『安古市高校研究紀要』一二号一九九一年　広島県立安古市高等学校）で、章段に応じて、感想法・創作法（続き物語）・手紙法（返歌を手紙に変換）・題名法（各段に題名）・作文法（「私の伊勢物語」）を活用して理解を深める学習指導を行っている。また、「古典学習指導のとりくみ―伊勢物語　二四段「梓弓」の場合―」（『国語教育研究』一九九四年三月　広島大学光葉会）において、「梓弓」の実践とともに「筒井筒」との比較読みも報告している。

3　成果と課題

①学習者の興味・関心、あるいは学習者の内的実態に配慮した教材の扱い、受容の把握がなされた。それらを学習指導に生かすことを求めた。②理解と表現を関連させ、表現による理解の定着、表現に基づく話し合いによる理解の深化を図る指導などがなされた。伊東武雄は、後に感想法・創作法・手紙法・題名法・作文法として発展的な表現指導を行った。③伊東武雄実践においては、読解の三読法による指導が繰り返された。その検証はまだなされていない。④伊東武雄実践では、広瀬節夫実践にも用いられた比較法が用いられ効果を収めている。

四　言語活動主義に基づく学習指導の展開

1　実践状況と背景

この時期は、バブル崩壊後、就職氷河期の時代である。学習者の意識は人間関係に向かい、いじめ問題が社会問題となった。一九八九年の学習指導要領の改訂において、古典は、「国語Ⅰ」・

「国語Ⅱ」に統合されるとともに、選択科目として「古典Ⅰ」・「古典Ⅱ」・「古典講読」が新設された。国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度を育成することが古典教育に期待され、古典教育の充実が求められた。『伊勢物語』の実践報告も充実していった。日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』（一九七六年一二月創刊）、『月刊国語教育』（一九八一年六月創刊　東京法令社）に中高等学校の実践論考が毎号掲載されるようになったことも背景にあると考える。

この時期には、以下の論考が発表された。宮内健治「劇化・物語化に発展させる古典指導」（大平浩哉編著『高等学校国語科　新しい授業の工夫二〇選〈第四集〉表現指導編〉』一九八九年四月　大修館書店）、宮下拓三「定時制における古典授業の試み（上）・（下）―伊勢物語『梓弓』（『月刊国語教育』一三―一三　一九八四年二月・一四―一　一九八四年三月　東京法令出版）、高木巧「単元『郷土の文学を楽しむ』―『伊勢物語』東下りの旅の心を読む―」（日本国語教育学会編『ことばの学び手を育てる　国語単元学習の新展開Ⅵ　高等学校編』一九九二年八月　東洋館出版）、江藤結花「古典に楽しませる学習指導の試み：『伊勢物語』の実践」（『国語教育研究』三七号　一九九四年三月　広島大学教育学部光葉会）、小桝雅典「初めての古文との出会い」（『国語教育研究』三八号　一九九五年三月　同）、岩永克子「単元・私たちの伊勢物語―国語Ⅰの教室より―」（『樟（活水教育研究）』八　活水中学・高等学校一九九六年三月）、山本映「想像力を働かせて、人物像をイメージ豊かに読み取らせる古典学習指導のこころみ―『シナリオ化』と『くらべ読み』を手がかりとして―」（一九九六年三月　大下学園国語科教育研究会研究紀要　三二　大下学園祇園高等学校）、渡辺春美「『伊勢物語』学習指導の試み―『みやびの世界を歩く』の場合―」（渡辺春美『国語科授業活性化の探究Ⅱ―古典（古文）教材を中心に―』（一九九八年八月　溪水社）。

宮内健治は、理解と表現の領域相互の関連を図ることが指導の効率化と学力の定着に繋がるとして、参考作品を例示した上で、四〇段をグループで脚本化させている。宮下拓三は、定時制高校において、「梓弓」を教材として授業を行った。原文の左右に意味・語法と訳を書かせ、発問と想像による作文によって登場人物の心情をとらえさせた。最後に「伊勢物語・梓弓を読みおわって」と題する作文を課している。全九時間の内三・四時間ころから学習者は集中し、積極的な姿勢で取り組んだことが作文にも見える。小桝雅典は、男の奪い去る愛が、恋愛感情に敏感な高校生の心を揺さぶるとして「芥川」を教材化した。授業は、学習プリントを用いて、学習者の考える姿勢、本文を読みこなそうとする姿勢を引き出している。山本映は、世羅博昭や江藤結花の実践に学び、二年生を対象に、登場人物をリアルにイメージし、学習者と古典との豊かな対話を目標に設定し展開した。「梓弓」を教材としてシナリオ化し、井原西鶴の「懐硯」（「案内しってむかしの寝所」）との比べ読みを展開した。

以下は、主題単元学習を方法として実践された。高木功は、一年生を対象に、「峠・川―旅の心を読む」を主題として授業

を展開した。遠足で訪れた「小夜の中山」を思い起こさせ「川・峠」をテーマとする作文を書かせて導入とし、認識を拡充させることを求めて「峠考」（山本太郎）・「川のほとりにて」（東山魁夷）・「峠」（石垣りん）を読ませている。その上で「東下り」に入り、学習者に課題作りを行わせ、グループに分かれて図書室に行き個人とグループの課題を調べて資料にまとめ、発表する授業を行った。課題の発表を基に中心語「すずろなり」「わぶ」を押さえて理解を深めた。本主題単元学習は、現代を生きる者の旅心を古典の世界の旅心につなぐことで、時空を超えて「東下り」の旅心への理解を深めたところに特色がある。渡辺春美は、高校一年生を対象に、「みやびの世界を歩く」を主題とし、人に応じて立ち現れる古典の価値にまっすぐに触れる授業を求めて展開した。基本（一斉）学習では「初冠」・「筒井筒」を教材とし、応用（班別）学習では「芥川」・「梓弓」・「むかしの若人」（四〇段）・「ゆく蛍」（四五）・「身をしる雨」（一〇七）を教材とし、表現と理解を繋ぎ、調べ発表する学習指導を行った。世羅博昭の実践に繋がる実践と言えよう。岩永克子は、「私たちの伊勢物語」をテーマに、ドラマ性の高いものばかり計二三段を教材とし、高校一年生女子に二四時間をかけて授業を展開している。全体学習で読み取りカードに整理する方法を学習し、その後の個別学習で整理方法を生かして読解を進めた。次に、テーマを選び、作品やレポートに取り組ませた。テーマは、作品の性格（冒頭末尾を調べて考察）、贈答関係・人間関係（全ての詠まれた歌から考察）、和歌の特徴（全ての和歌から修辞法の考察）、作中人物への手紙、翻案小説、百人一首を材料に歌物語創作などであった。作品やレポートは一冊にまとめ、合評会を開いている。岩永克子は、テストの成績では表現されない別の学力が見事に表された学習と評している。

2 『伊勢物語』の学習指導―江藤結花の場合―

(1) 古典教育観

担当クラスを調査すると学習者の約八割が古典を嫌いと答えた。学習者が読んでみたいと思えば、詳しく読むために言語的知識を学ぶ意欲も生じるとし、古典の世界に関心を持たせ、内容の面白さに触れさせ味わわせる必要があると考えた。

(2) 古典教材観

簡潔な文章の中に素朴で美しい人間の心情が描かれた歌物語である。具体性・個別性を削ぐことで人間の内面が強調され、強く読み手に迫り深い感銘を与える。学習者に言語的抵抗をあまり感じさせず、想像し、読みを創造する楽しさが味わえるとしている。「筒井筒」・「梓弓」の、愛に生きる女性の姿は驚きや感動を与え、人を愛することの意味を考え深めるきっかけになる。また、物語の中の女性達と共通の感情を発見し、時を超えて思いを共有できる魅力もある。『伊勢物語』は様々な可能性を含む魅力ある教材であるとした。単元主題を「『伊勢物語』に描かれた愛の形」として授業を展開している。

(3) 対象・時期

高等学校一年生、一九九一年度（不詳）

(4) 指導目標

目標は次の通りであった。①真実の愛に生きようとする人間の姿を読み取り、自らの愛に対する思いを深めさせる。②人物の心情を想像力豊かに読みとり作品の世界に浸り、古典を読む楽しさを味わわせる。

(5) 指導の実際

「『伊勢物語』に描かれた愛の形」の学習指導は、四次に分けて、以下の通りに進められた。

指導事項	指導内容
第一次「東下り」	旅の困難さと望郷の思い、「かきつばた」の歌と妻への思い、「名にし負はば」の歌と男の切実な思いの把握。「わぶ」「ものわびし」の理解。
第二次「筒井筒」	幼なじみの二人の清純な恋、一途で献身的な女の愛を把握し、愛に関する思いを深めさせる。「風吹けば」の歌にこめられた女の思いの理解。男が女のもとに戻った理由をとらえる。「かなし」の意味理解。
『大和物語』（一四九段）との比べ読み	男が河内へ行った理由、女の態度、女の態度への男の思い、河内へ行かなくなった理由、表現の違い、読者に与える影響を比較し整理する。
第三次「梓弓」	歌にこめた心情と歌を聞いた二人の思いを想像。真実の愛に生きようとする二人の葛藤と悲劇的な愛の奥深さを考える。三年間夫を待つ女の心情、「かなし」の理解。最後の女の歌にこめられた気持ち。悲劇の理由。悲劇の理由の追求。
第四次「レポート集制作」	合計八課題から選定。『伊勢物語』をとらえ直す課題、古代に生きる女性の姿や愛の形を考え、自らの在り方や現代を問い直す課題、愛に関する思いの整理、物語化。（江藤　結花「古典に楽しませる学習指導の試み：『伊勢物語』の実践」『国語教育研究』三七号　一九九四年三月　広島大学教育学部光葉会　二〇―二四頁参照）

授業は、授業者主導で展開している。原文のまま味わわせ、言語事項は絞って行い、登場人物の心情を想像させ、自由に発言させることを通して、各段の愛の形を読み深め、考えさせる指導を行っている。

(6) 学習者の学習実態

学習者は、第四次でレポートを書き、「レポート集」にまとめられた。一人の学習者は、「梓弓物語」を書いている。「昔から、いろいろな愛の形があったことでしょう。そして愛が強ければ強いほどより多くの悲しみが生まれていたことでしょう。私がそのことを強く考えるようになったのは、私の住んでいるこの村にある一つの岩にまつわる物語を聞いた時からです。」と書き起こし、「（歌を）書き終えた女は、愛する男と暮らした夢のようだった日々を思いながら、深い眠りについたそうです。女の亡骸の横で清水は、女の決して枯れることのない愛を象徴するかのようにこんこんと湧き出ていたそうです。そしてその流れは今も絶えることはありません。／／私は、きっとこの村に残された岩は、この物語の中の自分の愛を貫いた女と共に多くの人々に本当の愛とは何なのかを問いかけてくれるのではな

いかと思っています。」と結んでいる（約二四〇〇字）。

授業者は、学習者が「梓弓」に「純粋で深い愛」「悲しく切ない愛」を読みとり、女の最後を空しいあわれな死とせず、純粋な愛にふさわしく美しく安らかに描いていると評している。

⑺本実践の特色

特色は以下の点に窺える。①学習者の恋愛への興味・関心を『伊勢物語』の人間の心情・愛を描く章段に導き、学びを深めさせた。②主題「『伊勢物語』に描かれた愛の形」の設定によって章段の読みを求心的なものにした。これは世羅博昭の実践に学んでいる。③原文の読みを構造的な板書によって支えた。④考え想像させる問いによって理解を深めた。⑤広瀬節夫以来、比較読みが導入されている。⑥レポートのテーマを学習者の興味・関心、学びのスタイルに応じて複数用意し、モデル（「リレー小説梓弓」）を与えて意欲を高め、書くことを通して理解を深めた。⑦レポート集を製本して学びの成果を可視化した。

3　成果と課題

次の成果が見出される。①学習者の恋愛への興味・関心を『伊勢物語』の学習に関連させ、導き深める実践がなされた。②主題を基に教材の開発・編成、学習指導の組織化がなされ、求心的な学びの追求がなされた（主題単元学習）。世羅博昭実践を引き継ぐものといえる。③表現と理解を関連させた言語活動によって学習者が意欲的に取り組む実践が行われた。学習者は物語・シナリオなど虚構の作文に意欲的に取り組んだ。④グループ学習による成果を発表する学習がなされた。⑤教材、学習（レポート）課題が複数準備され、学習者が選択して学ぶ指導がなされた。⑤学習の成果を集成してまとめて学び合い、達成感・充実感がえられるようにした。

おわりに―考察のまとめ

指導内容に関しては、『伊勢物語』における「筒井筒」「梓弓」の内容に関する目標として、時代に関わらず、おおむね、さまざまな愛、愛と純情、愛の哀しみをとらえることが目指された。併せて、自らについて、人間について、時代、社会について考えを深めることも求められている。授業方法は様々に考えられ、学習者も意欲的に取り組み理解を深めている。『伊勢物語』は様々な可能性を含む魅力ある教材である。主題に関しては、「みやび」をとらえる実践はわずかである。

指導方法に関しては、次のとおりであった。

(1)　経験主義から能力主義へ―学習指導の模索（一九四五―一九六九年）期には、興味・関心の重視や話し合いによる学習指導の方法が見られた。また、「問題学習」が行われ、有効性が認められた。ここには、経験主義と増淵常吉の影響が窺える。

(2)　能力主義学習指導の展開（一九七〇―一九七七年）期には、学習者の興味・関心に基づく指導をとおして、読解の

基礎を身につけ、想像力を生かして読むことが求められた。その方法として「課題学習」、「学習の手引き」が用いられ、理解と表現の関連指導、虚構による表現、比べ読みも用いられた。ここには、増淵常吉・大村はまの影響が見える。また、主題単元学習が試みられ、段階的・発展的な指導過程の萌芽も窺える。

(3) 言語活動主義に基づく学習指導の始発（一九七八―一九八八年）期においては、学習者の興味・関心、あるいは学習者の内的実態に配慮した教材を開発・編成して授業を行い、受容の実態把握がなされた。それらを学習指導に生かすことが試みられた。理解と表現を関連させ、表現による理解の定着、表現に基づく話し合いによる理解の深化を図る指導などがなされた。また、「読解の三読法」が用いられたが、広がりを持つには至っていない。比較法が用いられ効果を収めている。

(4) 言語活動主義に基づく学習指導の展開（一九八九―一九九八年）期においては、学習者の興味・関心と教材の特色を主題に統合し、教材の開発・編成を行い、表現と理解を関連させた学習指導の組織化によって、学びを意欲的、かつ求心的に追求させる主題単元学習がなされた。主題単元学習はしだいに形を整えていった。大村はま・世羅博昭実践を引き継ぐものといえる。

課題としては、以下が見出される。①『伊勢物語』の特に「筒井筒」「梓弓」を純粋で深い愛、悲しく切ない愛の物語ととらえる指導でよいかという課題がある。「筒井筒」では、指導書において、「みやび」・「歌徳説話」を主題とするものが多いという。[注16] ②『伊勢物語』を読むための知識と技能が明確ではなく、読みをとおしてどのような力を育成するかも明らかではない。

注

(1) 八木雄一郎「中学校教授要目の成立過程における文章観」（『日本語の日本文学』四五号　二〇〇七年八月　筑波大学国語国文学会　二二頁）において、『伊勢物語』が、『中等教科日本文学史』（訂正四版　一九〇一年三月　同年同月検定通過　明治書院）で三頁の和文テクストとして掲載されていることを指摘している。

(2) 本観点は、古典（古文）教育実践の考察の観点として用いた。渡辺春美『「関係概念」に基づく古典教育の研究―古典教育活性化のための基礎論として―』（二〇一八年二月　溪水社　二三三頁参照）

(3) 広瀬節夫「『伊勢物語』の学習指導」（『国語教育研究』三号　一九六一年四月　広島大学教育学部光葉会　一二頁）

(4) 注（3）に同じ（一三頁）

(5) 注（3）に同じ（一四頁）

(6) 注（3）に同じ（一三頁）

(7) 注（3）に同じ（一二頁）

(8) 注（3）に同じ（一二頁）

(9)「『古典甲』の一つの扱い　伊勢物語『筒井筒』の指導」(『研究紀要』一九七三年四月　東京都高等学校国語教育研究会　五三―五七頁)

(10) 細谷藤策「『伊勢物語』〈筒井筒〉　教材の扱い方と実践授業の展開」(宮崎健三・野地潤家・石井茂編著『古典の教え方　物語・小説編』一九七二年五月　右文書院　一九八頁)

(11)『一九七〇年版学習指導要領　国語科編』「古典乙Ⅰ」の指導事項の「カ」に「作品に描かれた情景や人物を豊かな想像力をもってとらえること」がある。

(12) 世羅博昭「『伊勢物語』の学習指導―古典を意欲的にかつ楽しく読むことをめざして―」(『年報』二〇号　一九七九年四月　広島県高等学校教育研究会国語部会　実践は一九七七年　七九頁)

(13) 世羅博昭『『源氏物語』学習指導の探究』(一九八九年七月　溪水社　四〇九・四一〇頁)において、一九六〇年代末の高校紛争の中で高校生は、「教育とは何か」「古典教育の必要性は何か」などと教育の根本を問いただしたという。そこには受験体制に喘ぐ心底からの叫びがあった。生徒との討議、ぶつかり合いを通して、一九七二年以降、「学習者の興味・関心や問題意識に即した『学習テーマ』を設定して、古典作品を単元的展開のもとに読んでいく、という指導法が生まれていった。」と述べている。本実践もこの発展に位置づけることができる。

(14) 藤原与一『国語教育の技術と精神』(一九六五年七月　新光閣書店)によれば、素材読み―表現素材をおさえる読み(一四五頁)、文法読み―文章の構造・しくみの読み(一四六頁)、表現読み―表現に即した表現の味わいとりの読み(一五八頁)。

(15) 伊東武雄「古典学習指導の反省と課題―伊勢物語23・24段の受容の実態を中心に―」(『国語教育研究』二九号　広島大学教育学部光葉会　一九八五年六月　一九五頁)

(16) 早乙女利光「教材としての『伊勢物語』二十三段考」(『早稲田大学国語教育研究』二〇〇六年三月　早稲田大学国語教育学会　六五頁)、指導書によれば、他に、男女の結び付きの深さ、壊れやすい男女の関係、さまざまな愛の形に主題があるとされている。

(わたなべ　はるみ・京都ノートルダム女子大学)